

(鳴原県議のふるさと散歩)

秘湯・名目津温泉復活

秘湯・名目津温泉が七月一日オープンした。

二本松市が同市茂原字湯ノ作三十五に日帰り休養施設として「名目津温泉」を整備、七月一日落成式がなされオープンしたものであります。

名目津温泉の旧富士や旅館の最後の経営者菅野マサヨ氏相続人長女セツ子氏から旧岩代町が敷地を取得しており、休養施設の設置が合併後の大きな課題となっておりましたが、三保恵一市長の決断と二本松市議会議員各位のご協力により立派に完成したことを感謝申し上げます。また旧岩代町の大内正男様、旧岩代町議員各位のご尽力に敬意を表します。

二本松市は平成二十年十月に地質調査を実施、同二十一年九月建設に着手。本館棟は、木造平屋で建築面積二三四・五五平方メートル。二十四畳の休憩室が一室と浴室が二室のほか、湯沸室、事務室があり一億四千七百四十二万円を掛けて今年六月二十三日に完成した。泉質は単純弱放射能冷鉱泉で「フロン」含有量が高く、皮膚病などに良いとされている。

名目津温泉浴場経営の歴史

明治以前の浴場経営の歴史は判明し

ておりませんが、名目津温泉の所在地

二本松市茂原字湯ノ作三十五番地は旭村合併前は安達郡茂原村字湯ノ作七番地、宅地式畝九歩となっており二本松藩針道組茂原村最後の名主伊東十郎右衛門氏の所有地でありました。伊東氏は明治になり「久」と改名いたしました。

茂原村字湯ノ作には広大な土地を所有しており別荘を建て温泉を利用していたものと思慮されます。因みに伊東久翁が所有していた明治十五年六月当時の地籍帳による湯ノ作字の土地は、湯ノ作六番草山拾六歩、同七番宅地式畝九歩、同八番畑拾歩、同九番畑式拾五歩、同拾番畑式拾五歩、同拾壹番畑池式歩、同拾四番畑壹畝歩、同拾五番畑式拾四歩、同拾六番畑七歩、同拾七番田参畝式拾歩、同拾八番畑四畝拾九歩、同拾九番畑壹反式畝式拾五歩、同拾拾番畑壹畝拾九歩、同式拾壹番畑式畝壹歩、同参拾六番柴山壹町六畝式拾四歩、同参拾七番柴山壹町六畝式拾八歩であります。明治の三十年代、茂原字宮ノ脇(俗称平沢)の渡邊軍次氏は「伊東氏より土地を取得分家」浴場経営を始めました。

宅地の裏山、字湯ノ作参拾参番地

には柴山壹町壹反五畝式拾五歩、口太川対岸には字湯ノ作四拾番柴山九反壹畝八歩、近辺の式拾五番地柴山壹反四畝拾五歩、字川前九拾壹番地柴山壹反八歩、字大久保六拾五番地山林式反参畝拾四歩を明治十五年当時から所有しており燃料用薪木の確保には苦勞しなかつたことと思います。軍次翁は昭和三年四月十五日没八十二歳、二代目は兼之助氏であります。昭和七年一月二十八日没五十五歳、初代軍次氏生家茂原平沢の渡邊家より貞三氏を養子に迎え三代目を継ぎました。昭和十一年十二月湯屋を神尾眞氏に譲渡、百目木字町地内(現在勢州屋酒店)で富士屋旅館の経営を始めました。貞三氏は昭和二十八年頃百目木の旅館を廃業、名目津温泉神尾仁氏宅西脇の地に湯屋を新築、株

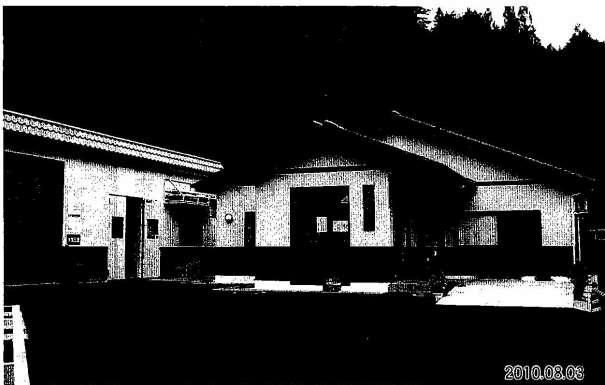
式会社名目津温泉を設立創業いたしました。浴場経営二軒の時代もありました。神尾仁氏は、昭和四十年頃廃業、貞三氏は営業不振により営業を停止、その後平市の森氏等営業するもうまくいかず昭和四十六年一月一日、横浜市鶴見区生麦居住の菅野マサヨ氏に譲渡、菅野氏は永年勤務した保土ヶ谷化学(株)を定年退職した夫の安衛氏と茂原に居住されました。その後高齢により長女宅に同居されたことから四月二十八日マサヨ氏長女で茨城県築波郡伊奈村居住のセツ子氏から岩代町が譲渡を受け同年十二月一日二本松市に承継されました。

「湯ノ作」の地名

茂原村「湯ノ作」の地名は公式文献

では、正徳六年(一七二六年)検地帳にあり、茂原村名主先祖書上中には正徳六年以前の記述の中に「名主 高橋太郎右衛門(改長七) 弟 仁右衛門 此仁右衛門義八願之上、池畑、新屋敷立取田地ヲ誘致矣。其外湯ノ作新築切立候節、御上様より人足百人御拝借二而切発相讓申候、これは卯吉、新蔵先祖也」とあります。

今から三百年前にすでに「湯ノ作」の地名が使用されていたことは、口太川の川端に湧出している冷泉が厳寒期には湯気が立ち上り、さらに温泉独特の臭いにその違いに気付いた村人が地名を「湯ノ作」と名付けたものと考えられ、公式文献は発見されていませんが「湯ノ作」と称した歴史は二倍、三倍の歴史に遡る可能性もあります。



名目津温泉施設全景



男子用風呂 窓下に口太川の流れを望むことができる



施設前の口太川の溪流 対岸にはモミジの古木が多くある